

例会記事

五月例会 五月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、安政版『医心方』の出版をめぐる『医心方提要』より

小曾戸 洋、石原 武

一、コレラ病因論争—コッホとペッテンコーフェル—

山本俊一

六月例会 六月十六日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(六月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、小川先生のプロフィール—スライドで— 酒井シヅ

一、司馬江漢とクジラー—江漢の西遊をめぐる

宗田 一

一、小川君を憶ふ

一、その他

七月例会 七月二十一日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(七月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、三宅秀宛手紙(数点)の読解

一、古代における医療の移動集団

酒井シヅ

宮内 千年

例会講演要旨

コレラ病因論争

コッホとペッテンコーフェル

山本俊一

ペッテンコーフェルはインド、ヨーロッパのコレラ流行の伝播状況を分析し、病原要因(x)、環境要因(y)および個体要因(z)がそれぞれ関与しているという学説を樹立し、一八七一—一八七三年頃にそれを発表した。一方、それより約一〇年後れてコッホがエジプトおよびインドのコレラ調査を終え、病原体としてコンマ菌(コレラ菌)を分離し、一八八四年にそれを報告した。

一八八五年五月四日(月)から五月八日(金)の連続五日間にわたりベルリンで行なわれた第二回コレラ問題検討会において両者が出席して歴史的な討論が行なわれた。コッホのコンマ菌説に対しては、ペッテンコーフェルはコレラ病原体の存在を一般論としては認めていたので原則的な点で反対することはなかったが、その菌のもつ疫学的特性が自説に合わないことからこれに対して強い疑いをもった。両者の意見の対立が際立ったのは、コッホはコンマ菌が人体内で増殖し、それを多量に含む大便および吐物が飲料水を汚染して流行が起こると主張したのに対して、ペッテンコーフェルは、コレラ病原体は主として適度の含水量をもった土壌内で増殖すると言いつ張った点であった。したがって、コレラ対

策としてコッホは大便および吐物の消毒を提唱したのに対して、ペッテンコーフェルは下水道の完備を推奨した。この検討会ではペッテンコーフェルの主張がいま一步具体性を欠いたので、争点がややぼやけてしまったが、大勢として軍配はコッホに挙がった。そして一八九二年コレラ菌で汚染されたエルベ川を水源としていたハンブルグで水による爆発的なコレラ流行が起こり、コッホの学説が決定的に受け入れられることとなった。このようにペッテンコーフェルが誤りを犯した基本的な理由は、コレラ流行の発生が偶然の因子に大きく支配されているにもかかわらず、これを決定論的な立場で解釈しようとしたところにあつたと言えよう。

新刊紹介

日本耳鼻咽喉科学会編『日本耳鼻咽喉科史』

日本耳鼻咽喉科学会は、明治二六年二月に学会の前身である東京耳鼻咽喉科会を結成してから昭和五八年に学会創立九〇周年をむかえた。これを機に、先人の労をしのぶとともに、学会の著実な歩みをしるし、将来の隆昌を願って発刊したのが本書である。古代から現代にいたるまでの国内の耳鼻咽喉科に関する史料をひろく収集するとともに、関連する海外の資料も可能なかぎり収録している。

その目次の一部を紹介すると、日本耳鼻咽喉科略史、耳鼻咽喉科学教室史、耳鼻咽喉科地方会史、耳鼻咽喉科医療の変遷、関連する学会ならびに研究会史、耳鼻咽喉科図書一覧、耳鼻咽喉科人名録などで、総ページ八六一ページにおよぶ大著である。

申込み先 千108 東京都港区高輪三ノ二三ノ一四 シャトー高輪八〇七号 日本耳鼻咽喉科学会、頒価一万円。

(Y・F)